

金子光晴の第一回滞欧と『こがね蟲』

—沢木耕太郎のエッセイに重ねて—

田 辺 武 光

Poet KANEKO MITSUHARU's first stay in Europe and his work "Golden Scarab Beetle."

Takemitsu Tanabe

This work may show a certain difficulty for us Asians to understand European culture.

It is important to compare KANEKO's poems written in Asia with the ones written in Europe.

本年度学部共通科目「比較文化論」のコーディネートーターとして、講義の導入部分を受け持つことになり、さて、何を話そうかと考えた結果が、詩人金子光晴の紹介だった。担当の先生方の分野は中国、マレーシア、フランス、ドイツの四国に跨っているが、金子光晴はそのうちの三国を実際に見聞している——見聞などという表現のおよそ当てはまりにくい、型破りな彼の行程だが——選んだ動機は、このように単純なものだったが、学生諸君を前に、その旅の跡を大まかに辿り、時々作品を示し、最後に、あの「富士」という有名な詩の、

なんだ。糞面白くもない
 あらひざらした浴衣のやうな
 富士。

が、さまざまな土地と文化を体験したあとでの、批評精神を通して見つめ直した富士山の姿であることを、理解してもらおうと努めた。どの程度そのこと

に成功したかはわからないが、同時に、その授業を機会に、自分としても何かまとめておきたい、と言おうか、何か刻み付けておきたい気持ちも生まれて来た。本稿をいちおう〈研究ノート〉と分類してみたが、むしろ〈読書メモ〉、それも単に問いかけを並べただけのメモ用紙に過ぎないかも知れないのだが。

*

金子光晴は一八九五年（明治二十八年）、愛知県に生まれた。そして、今は最初の洋行時に限って、そのあたりを略年表化すれば（実に多くの人々が既に行なったことの繰り返しとはいえず）、次のようになる。

一九一九年（大正八年）二十四才。

一月 処女詩集『赤土の家』刊行。その刊行
 記念と渡欧送別の会が、佐藤惣之助

らによって開かる。

二月十一日 神戸より出港（スエズ運河經由）。

三月末 英国リヴァプール到着。

五月 ロンドンからベルギー（フランドル地方）へ移る。日本の美術品蒐集

家イヴァン・ルパージュ氏の世話に

なり、ブリュッセル市郊外の自宅前、

居酒屋の二階に間借りして住む。

一九二〇年（大正九年）十二月中旬、仏国マルセ

イユより帰国の途に就く。

一九二二年（大正十年）一月、帰着。

一九二三年（大正十二年）七月、滞在の成果たる

詩集『こがね蟲』を上梓。

この生涯最初の外国旅行は、金子家に出入りしていた骨董商に誘われてのことだが、経済的には、亡き養父の残した遺産をたのめる事情も手伝っていた。そして、ほとんど偶然に滞在することになったベル

ギー、ブリュッセル郊外での一年半に、それまでのフランス語を中心とした素養をもとに、多大の収穫がもたらされることになる。『こがね蟲』の「自序」では、特にその間の半年を強調して、次のように述べている。その用語は、既にほとんど作品そのものである。

西暦一千九百十九年二月、余の欧羅巴旅行は積歳アイテルンツの膿漿を切解した。それは、永年の「懈怠」ウエグを、いみじくも脱套した。

余は「無目的」の爽快を呼吸した。

生涯の楽しい蜜月、ブリュッセル郊外、ショーセー、ダックトに沿える小村、デイーガムに居住せる六ヶ月間、まことに、余は、一切の羈絆を忘れ、心ゆくばかり寛かな『煙草の時』を享受した。

この時の彼の滞在が、後のそれらと比べていかに静穏なものだったかが、右の短い引用からもよくわ

かる。その静穏な時間を利用して、ヴェルハーレン、ボードレールはじめ、数多くの詩人の作品に没頭することが出来た。——と、こうした記述を行ないながら面映いとまで感じられるほど、金子光晴についてはもはや至るところで、さまざまに語り尽くされている。しかも彼ほど大きな存在に、今改めて自分などがちらとでも食い付けるものだろうか？ しかしそれでもなお、彼の図録評伝である『新潮日本文学アルバム45・金子光晴』（新潮社、一九九四年）の巻末で、「旅の混沌」と題された沢木耕太郎のエッセイのような文章に出会うと、何かしら自分でも書き付けておきたい気持ちに駆られるのである……

金子光晴について、私にはひとつの疑問があった。

と、沢木はいかにも興味を引き出すような語り口で、始めている。そして、金子光晴最晩年の『どくろ杯』『ねむれ巴里』『西ひがし』を、「六十年に及ぼうと

いう生涯の執筆活動の背骨ともなるべき」三部作と見なし、これらを三十年も以前に書かれた『マレー蘭印紀行』と比較して、このように書く。

ところが、この「三部作」をひとつの長大な紀行文として読むと、同じ金子光晴の、それも同じ旅の一部を描いたはずの『マレー蘭印紀行』と、まったく異なる印象を受けることに驚かされる。

(……)『マレー蘭印紀行』には「土地」はあるが「私」は存在しないのだ。とりわけその中心をなすマレー紀行には、ほとんど「眼」と「耳」と化し、ひたすら「土地」を映すことに専念しているかに見える金子光晴が存在するだけである。(……)

一方、(……)「三部作」には、「私」しか存在しないといてもよい。「土地」は「私」を語るための道具立てに過ぎなくなっている。旅をしている「私」はいる。(……)だが、「土地」

が希薄なのだ。

そして、不思議なことに、その結果として、『マレー蘭印紀行』にも『どくろ杯』以下の「三部作」にも、いきいきとした「旅」が存在しないことになった。

引用が長くなったが、いかにも〈旅〉の作家らしい重要な指摘と言えるだろう。続いて沢木は、冒頭で予告した疑問を、具体的にこう明らかにするのである。

(……) 私が疑問だったのは、作品としての質の高さとは別に、それらが紀行文としては異形のものとなってしまうのはなぜか、ということだった。

*

「功成り名遂げた」という言い回しがあるが、

金子光晴（以下、光晴とする）の詩業を最初から辿り直す時、ふと浮かぶのは、光晴とはおよそ無縁なこの喩えである。最初期の習作の中に、たまたま同年の名篇と同じ表現を見つけるのは、まさに楽しい発見というものであるし、駄作、失敗作とされる作品でも、後年の（大）達成を知っておれば、余裕を持って鑑賞することが出来る。それはちようと、功成り名遂げた人物の足跡を、とりわけ若年期の迷いや探求の跡を、生涯の終った時点から安心して眺め直すようなものではないだろうか、と。彼の最初の外国旅行、第一回滞欧の結実である『こがね蟲』にしても、そのような鑑賞の仕方が出来る。文学史的には「急速に過去のものとなりつつあった(……)終末に近い近代詩の残映」伊藤信吉「現代詩の鑑賞・下巻」新潮文庫、一九五四年）として捉えられる作品群も、一詩人の二十代前半における仕事として見詰め直せば、何という驚くべき成果、あるいは才能の表れだろうか！ しかもそれらは、人生で初めてヨーロッパに足を付けた日本人（と言おうか、アジ

アの一隅のある画定された区域に生まれ、そして生活して来た人間)が、その長くもない滞在期間中に成した仕事なのである。

序文(「自序」)と二十篇近い詩、五篇の散文詩で構成される『こがね蟲』は、巻末に付された後記代わりの「作品年表」によって、それぞれの作品が滞在のどの時期に書かれたか、ほぼ特定出来るようになっていゝ。抜き書きすれば、次のようになる。

「雲」一九一九年五月(フランドル到着後二ヶ月)。

「三月」同年四月から七月中頃にかけて。

「時は嘆く」同年七月中頃。

「翡翠の家」同年七月下旬。

「誘惑」「神話」同年八月から九月。

「金亀子」「夢」「風雅帖」同年十月から帰国時まで、など。

沢木はその長からぬエッセイで、光晴の〈旅〉について考察を進めるにあたり、「作品としての質の

高さとは別に」と断っているが、ここで『こがね蟲』を、〈足を据えた異国の土地と人々からの吸収。著者が滞在したベルギーという土地の、ヨーロッパでも厳密には西部ヨーロッパの、その文化の受容〉という観点から読み直すならば、やはり同じ断りが必要になるだろう。優雅というよりはむしろ激越、言葉がほとんど追いつかないかに見える高揚と凝縮に、しばしば圧倒されながらも、である。

雲よ。

栄光ある蒼空の騎乗よ。

(……)

お前の心情に栄えてゐる閱歴を語れ。

放縦な胸の憂苦を語れ。

詩集の端緒を成すこの「雲」に出会って、先行詩集『赤土の家』を占めていた海が、フランドル地方到着後二ヶ月して書かれた本篇では、文字通り雲に取って代わられている——これぞ、大陸としての

ヨーロッパ的なもの出現、その受容の始まりか、と身構えても、風景はしかし特にヨーロッパである必要はない。次の「三月」に移れば、その傾向はさらに強まる。この時期、光晴の心を占めて放すことがないのは、「永年の『懈怠』^{おとだり}を脱套」出来た高揚感にもかかわらず、万物の盛に付きまとう衰、浮に付きまとう沈のテーマとすることが出来るだろうか。しかしそれはそれとして、ここで舞台となるのは、もはや彼が後にして来た土地、故国日本であり、さらに「時は嘆く」を経て「翡翠の家」に至れば、ヨーロッパの入り込む余地は、まさにこれっぽっちもない。滞在後四ヶ月が経過しようという時期に制作されるのは、もはや回想そのものである。

林叢に、金色の木実採る日、

燦めき揺れる青葉の空に、蜻蛉釣る日、

梢に盲目の甲虫摘む日、

其頃、私は頬赤い少年であった。

私は熱病程、空想を求めた少年であった。

あるいは、自分としては、ここでこんな風に、ただ無用に行数を費やしているだけ、ということになるのだろうか？ 彼の詩友、吉田一穂が、詩集巻末の跋文で、「二十五歳の懶惰は金色に眠っている」という作品「二十五歳」の一行を引用しながら、次のように指摘しているではないか。「彼の詩篇の全てが纏綿として故国へよする切実な『郷愁』^{ノスタルジイ}のそれである」と。さらには光晴自身、「自序」の中で、こうも書いているではないか。

(……) 然し、夫は埃と熱の現実の饗宴ではなくて、余が心象に映る華かな、幻燈に過ぎない。

これらを引いたうえで、沢木に倣って「『こがね蟲』には『土地』がなく『私』だけがある」と言えば、それでも済むことなのか？ 要するに、「章句D」に至ってようやく確認出来るようなヨーロッパ、あ

るいは北欧の登場が余りにも少なく、登場してさえ、余りにも希薄であることに驚かされるのだ。

淡い陽差しに急ぐ北欧の冬の暮足。

籠のカナリアが生命より細くないてゐる丈、

むしろ、視点を變えて、当時の作風の一頂点とも見なし得る「神話」のような作品に注意を集中すればいいのだろうか。それは、言うならば、現に足を据える土地を無縁としてまで築き上げた楼閣である。

お、地上が熱気高く、湿潤多くあつた頃、
世界は、猶、情熱の伝奇であつた。

——敢えて、自問してみよう。現に滞在する土地も無縁なまでに楼閣の構築に詩人を没頭させるもの、それは何なのか？ なぜまた、この地にあつてまで、過剰なまでに漢語を多用した文語体でなければならぬのか？ 仮に、仮に、これらはいずれも、初め

て足を踏み入れた土地と人々への形を変えた、あるいは無意識の〈拒絶〉、〈反発〉なのだとしたら？

だからこそ、「全てが纏綿として故国へよする切実な『郷愁』」になつてゐるのだ、と？ あるいは、逆の見方をするなら、初めての異国で、半年もたたずしてこのような楼閣を打ち立てるとは、何という覚悟の座つた詩的精神であらうか、とも……

「神話」の「三」までを通過した者の目には、詩集の題名にも取られた「二十五歳」「金亀子」などは、むしろ感傷的で、弱々しいとさえ映ってしまう。土地の風物もまた、他人の絵のように、間接的に現れるのみである。

鐘楼や、森が、時計台が、油絵の如く（……）

後年の作品「紋」につながるジャポニズムを確認出来るかのような「風雅帖」も、今しがたの問いを掻き立てるばかりで、「近代詩の最後の人」（伊藤信吉・前出）としての光晴を見ようとする目には、以

上、ここまでで充分ではないか、とさえ思われる。

とはいえ、『こがね蟲』に沢木の言う「土地」が全く欠けているわけではなく、ヨーロッパの受容という観点に立つのなら、むしろこれ以降を見落すべきでないかも知れない。「拾遺二篇」中の「熊笹」は、次の詩集『大腐乱頌』へのつながりを考えさせるという意味で、さて置くとしても、ブリュッセル滞在の恩人イヴァン・ルパージュに捧げられた「鐘は鳴る」は、まさに土地の風物からの産物であるし、いっぽう「散文詩」の「羅紗売」には、「零落の陰影を曳くロシアの亡命人」を通して、帰朝直後の光晴自身の不安定な心境を認めることが出来ようし、また不完全ながら日本と西洋がそこに対置されているという意味で、注意を引く。

明放しな、長閑な、狭少しい、乱雑な、然し、
恐しく生々した営の、比『新日本』の首都(……)

*

さて、沢木耕太郎のエッセイに話を戻すと、彼は十頁足らずのその文章の後半で、「(先の)疑問が解きほぐされていくように感じられる(光晴の)文章に遭遇することになった。」と、結論に導いていく。それは、『金子光晴全集』(中央公論社、一九七六年)には収録されておらず、このエッセイが掲載されている『新潮日本文学アルバム』中に、原稿五枚、地図などが写真として紹介されているのみの「フランドル遊記」のことである。この未完の文章と出会って、沢木は次のように書く。

それはタイトル通りの紛れもない紀行文だった。そして長くないその「フランドル遊記」には、『マレー蘭印紀行』にも「三部作」にもなかった「旅」が存在していた。つまり「私」も「土地」も存在していたのだ。いくつかの掌編が無造作に並べられているだけのその紀行文には、旅の

意味を必死でつかみ取ろうとしている若き日の金子光晴がいて、身も心も軋むような格闘を続けている相手としての異邦が存在する。(……) 焦燥をもたらすと同時にそれを癒してくれもする異邦の風土と人々の中に深く身を浸していたのだ。

もつとも、光晴のこの紀行文は最初の滞欧時のもではなく、それから十年以上もが経過した、結果的には五年間にも及ぶ放浪の一部、第二次滞欧の折の記録である。直筆原稿の写真から、一節を書き写してみよう。

(……) マダムはさう云ってちっと(暖炉の)火を眺めてゐる。二人の子供たちもちっとそれをながめてゐる。火がその顔の一面をあかるくして、息をついてゐる。生活はここでは少しのうごきもない、落ちつきそのもので、内容こそ新しい無宗教的な家庭であつたが、更にふかい

ところにはエギリスや市庁オテル・ド・シと全じやうな、中世紀につゞいてゐるのであつた。

奔馳、流浪……そして反逆のための反逆。アジアからヨーロッパに、さらにどこへ放されてゆくのか、あて途もない私の現在とのあひだの生きかたのちがひは又どうであろう。(……)

確かに、旅や滞在による土地の歴史、生活、風習、もろもろの受容という観点から見ると、光晴の未完成のこの紀行文には、『こがね蟲』に欠けているものを、視線の深まりと共に補ってくれるだけの内容が込められている。あるいは、内容を期待出来るだけのものが込められている。そして、人が旅や滞在によって向かい合う異邦の地からのさまざまな受容、それをいかに行うべきかということを考える時、これらの言葉は少なからぬものを示唆してくれている。

とはいっても、エッセイの結びで沢木が夢想するように、「(光晴の)旅の全体が『フランドル遊記』

の方向で書かれていたらどうなっていたらろう。」とまで、仮定を進めていいものだろうか？ 詩人としての光晴のその後の壮大な足跡を重んじる者には、むしろそうはすべきでない、という気がする。とりあえず重要なことは、一九一八年、あの最初のヨーロッパ滞在で、光晴はこのような受容のかたちを残すことはしなかった、という事実の確認だろう。

*

——違うのだ、問題はもつと別のところにあるのだ、と言うべきだろうか。それとも、それはそれとして、また別の次元からも問題を検討しなければならぬのだ、と言うべきだろうか。

ここで唐突と飛躍を恐れることなく、『こがね蟲』の冒頭を飾る作品として先に引用した「雲」、その出だし数行と、後年の作品「旗」（詩集『女たちへのエレジー』、刊行は第二次大戦後の一九四九年）からの数行を併置してみたい。

雲よ。

(……)

渺か、青銅の森の彼方を撼動し、
意、王侯の如く倨傲り、

国境と、白金の嶺を渉る者よ。

丘のうへには、禿筆を並べたやうな椰子。雲は流れる。そらのかぎりを諸国の旗々で飾りわたしたやうに。その旗のへんぽんと翻る方へ。なびく方へ。身軽な旅の装ひ。

(……)

一つの国の引越してゆくパノラマのやうな空を。

双方の雲の風景のあいだに横たわるのは、定かならぬ長い時間だが、そんなことは今はどうでも良いだろう、二つの雲の違いが感じ取れるならば。後者

の雲の姿に、前者にはない人間性——人間の性、いや、人類的な性——が、何かしらそう呼べるものが躍動しているのを感じ出来るならば。そしてさらに、前者の舞台がヨーロッパ（ベルギー）であり、後者のそれがアジア（ここではマレーシア、ジョホール）であることを踏まえるならば。

沢木のエッセイをいったん経由したあと、我々にはまた別の形で問いかけを行うことが出来るのである。彼の言う「異邦の風土と人々」、その異邦をさらに進めるなら、そこには例えば「東洋」と「西洋」がある。「アジア」と「ヨーロッパ」がある。仮に、詩人金子光晴が最初の外地滞在として、ヨーロッパではなくアジアを選んでいたら、どうなっていただろうか？ ベルギーではなく、中国かマレーシアに滞在していたら？ さらに、彼がまず最初にアジアの地に足を踏み入れ、そのあとでヨーロッパに向かっていったとしたら？ そのいずれの場合にも、たぶんもはや、フランドルの地で「ソロモン宮の如く『脆弱』と『豪華』の雲の峯を数多建築」（『こがね蟲』

「自序」）することはなかっただろう。これは当時の世界史的状况の違い、ベルギーの〈静〉と、例えば中国の、一旅行者をさえ引きずり込まずにはおかない〈動〉を考慮に入れずとも、言えることだろう。

確かに、違うのだ。「(光晴の)旅の全体が『フランドル遊記』の方向で書かれていたらどうなっていただろう。」と沢木が仮定するその方向の先には、一詩人が打ち立てた比類ない詩業が見えているからだ。ただし、と断らねばならない。彼が東洋や日本を舞台に掴み取った成果の中にこそ、と。沢木の考える「『フランドル遊記』の方向」で、その後二度とヨーロッパは扱われていないし、(最晩年の「三部作」に現れたヨーロッパには、彼も認める通り〈土地〉が欠けている。)もしも当時、そのような方向で光晴が異邦としてのヨーロッパに入って行ったとしたら、あるいは、入って行けるような資質の持ち主であったとしたら、その没後十六年たって、清岡卓行が『金子光晴詩集』（岩波文庫、一九九一年）の後記でいみじくも評するような、「あまねく人間

的で現実的な」達成は、おそらく成されなかつただろう。「寂しさの歌」を頂点とする記念碑的作品群は生まれることがなかつただろう。

言葉を単純にして、結びの問いかけを行つてみよう。詩人金子光晴にとつて——彼ほどの並外れた個性にとつてさえ——結局のところ、ヨーロッパは難しかったのではないか？ この問いは直ちに我々に撥ね返つて来る。我々アジア（の一隅のある画定された区域）に生まれ、そして住む者にとつて、ヨーロッパの受容は本質的に困難なものを含んでいるのではないか？ 簡潔にこう自問しながら、金子光晴の足跡と詩作を辿り直すことは、大いに意義ある作業に違いない。なぜなら彼は、一身のうちにアジアとヨーロッパの刻印を併せ持つ、あるいは沢木の言葉を借りて言うなら、「この二つの異邦を相手として、身も心も軋むような格闘を続けた」稀有の存在だからである。